

■空に舞う龍の姿を奉納…それが‘龍勢祭り’の真髄とみた(^_^)b

なんでも‘龍勢祭り’には、400年前の江戸時代初期の頃から、近隣の農民たちが、集落単位に手作りロケットを競いながら打ち上げて奉納してきた伝統があり、現在では火薬製造取扱の資格を得た27の流派がそれぞれ独自に受け継いでいるようだ。

途中、椋神社の祭典で1時間ほどの中断があるほかは、朝9時前から、夕方5時前まで15分間隔のペースで30発を打ち上げるのが全体の流れだ。

各流派は、秘伝の技法で1年かけて製作した手作りロケットを大勢で担ぎ、椋神社から500メートルほど離れた山中の発射台まで運び込む(写真6)。

発射準備が進む中、椋神社のそばに組まれた櫓の上では、流派の代表が拡声器を通し、「とーざいー、とーざいー」と口上を始める。

流派の名称や奉納者を紹介し、矢柄の特徴を説明して願いを唱え、最後に「むくのじんじゃにごほーのー」の台詞で締めるとこれが点火の合図となる。10秒ほどすると轟音とともに空に飛び立ち、上がり切るや赤や青や白の煙が風に吹かれて秋の空に舞うのだった。

そんな中、さすがに30発も打ち上げれば不具合なものも出てくる。たとえば、点火はしたもののまったく上昇せず花火が爆発してしまうものがある(写真7)。このように、こっぴみじんになる姿は、筒がはねるように見えるため‘ツツッパネ’と言うそうだ。

しかし、このような失敗であっても奉納であることには変わらない。これも龍の姿なのだと思える者の心があれば、失敗と決めつけてしまうのは不粋であろう。

‘龍勢祭り’は、どんな龍の姿であっても奉納する神事なのだと思えた気になったのは、気のせいかな(^_^)；



(写真6) かつぐ



(写真7) ツツッパネ



(写真8) 酒蔵煙突



(写真9) 見上げて



(写真10) 縁側酒

■ ‘龍勢祭り’で出会った酒蔵で(o^_^o)

さて、午前中に打ち上げを10発、見物し、‘龍勢祭り’の真髄に触れた気になっていたのだが、ずっと同じ場所で見続けていたせいもあり少し飽きてきた。

空を見上げると雲が出てきていた。白い煙を噴きながら打ち上がる龍勢は、青い空を背景にしてこそ映えるというものだ。ならばと、見物は二の次にして周辺を散策してみることにした。

雲はその後もどんどん広がり、空一面、雲だらけになってしまった。

「これじゃつまらないなあ」と思いながらぶらぶら歩いていると、側面に‘秩父 小次郎’と書かれた背の高い煙突が現れた(写真8)。

「おっ、これは酒蔵じゃないか。今日は祭り見物の客を相手に小売でもやってんだろっ」

と思ひながら杉玉が飾つてある正面まで行つてみると案の定だった。

酒蔵の名称は‘秩父菊水酒造’。店先で飲み頃に冷えたカップ酒を売っていたので「立ち飲みでもするか」とすかさず購入。するとその時、曇り空ではあつたが一筋の白煙が大きな音とともに上がつて行くのが見えたので、その場に居合わせた人たちと一緒に空を見上げた（写真9）。

「酒を飲みながらの龍勢見物も悪くないなあ」と喜んでると、酒蔵の人が気を利かして「そこの縁側に座るといいよ、よく見えるから」と案内してくれた。

朝からずっと立ちっぱなしだったので、お言葉に甘えることにした。

「ふらつとやってきたよそ者に、見物がてらの縁側酒とは、粋な酒蔵よのお」と、いい気になつてつぶやきながら、もう一度、龍勢見物に連れ戻してくれたカップ酒をグイッと飲んだ（写真10）。うまかぁ(*^o^*)/

[縁側酒な旅 実施日：2012年(平成24年)10月14日(日)]

言い訳

櫻木 大祐

今回は、『私は酔うと何故、相手にとって不愉快で、なおかつ自分にとって不利益な言葉を発してしまうのか?』について考察(言い訳)したいと思う。

①社交性

私はかなりの人見知りで、素面の時は全くと言っていいほど話せない。仕事での客との会話は、25歳ぐらいまではほぼ出来ず、子供相手でも緊張して手に汗をかき、声も出ない始末。ピアノのリサイタルで、綺麗なお姉さんが肩口のあいたドレスなぞ着て舞台袖にいたときなんて、私にとってはそんなもん半裸でしかなく、目を見ての会話などもつての他。「はい」と「どうぞ」をボソツと言うのが精一杯。そんな有り様だった。最近こそ、私のこの『外出するヒキコモリ』のような性分は、仕事の上では改善されつつあるが、社交の場ではまだまだである。

②美意識

私は幼少の頃から美しいモノが大好きだった。花や草木、文字、言葉、文章、音楽、絵画、映画、演劇、そして女性。その当時、芸術という言葉を知らなかったが、それらのモノをただ美しいと思ひ、好きだった。やがて芸術という言葉を知つた時、「理解出来ない美しさ」というのが在ることを知つてしまう。その時出会つたのが、岡本太郎の『芸術は爆発だ』という言葉だった。何故だか救われた気がした。芸術は理解することではなく、感じることなんだ。「なんだこれは?」という違和感や驚き。「老人の皺」や「労働者の手」が持つ温かみや深さ。「運命」の最初の八分休符や「ゲルニカ」のキュビズム。目の前が

パッと開けた感じがし、そこは極彩色の美の世界だった。

③思春期

美しさを見つけることが趣味のようになった私にも思春期が訪れて、それは惚れっぽい青年を作っていた。数少ない友人は、私の守備範囲の広さを笑ったが、我、意に介せず。半分本気で「美意識の深さぢゃ、ボケ〜！」と言っていた。しかし、超奥手の私には為す術もなく、それをまた友人が笑うのであった。不遇の青春時代である。

④同棲

そんな私でも二度の同棲生活を経験した。一度目は22歳の頃。懲り性というよりは、好きになったらしつこいタイプの私は、その当時の行き付けの焼肉屋で、ほぼ毎日タン塩二人前とバーボンという夕食をとっていた。そこで意気投合し、そんな関係になったのだが、半年で別れた。そもそも、彼女が好きだったのかどうかも定かではない。そう思っていた。しかし、ほどなくして折尾での暴飲暴食の日々が始まる。毎晩つぶれるまで飲み、朝方吐いては出勤する。そんな毎日だった。どうやらいわゆる骨抜きにされていたようだ。そして二度目の春到来。二歳年下の女性。私のベタボレだった。感受性が強く、なんでも器用にこなす彼女に、私は心酔しきっていた。それこそ信者のように崇拜していたと言ってもいいくらいに…。それでも別れはやって来た。別れの理由なんてもう忘れた。平成15年6月、戸畑に引っ越してきた。職場の近くに住んで、仕事で忘れようと思ったからだ。でも、その時はダメージ回復にかなりの長い時間を費やした。

以上4つのエピソードから

『私は極度のシャイであるにも関わらず、美意識が深く(!?)、そして男女問わず一度好きになったら恐ろしくしつこい。だから、人に迷惑をかけないように、罵詈雑言で自分の暴走に対する予防線を張っているのではなかろうか?』

こんな言い訳どうすか?

天籟寺川橋物語その1

上田喜久雄

菅原橋・天神橋

長い暗渠を抜け、ふたたび川が姿を見せるのが菅原橋からである。その橋から10メートルも離れないところに金色の擬宝珠をつけた天神橋が架かっている。

菅原橋も天神橋もどちらも、菅公ゆかりの橋である。

延喜元年1月25日(901)太宰権師に左遷され、京都より太宰府に赴く折、立ち寄ったのが天籟寺で、公没後その遺徳を偲んで建立されたのが、菅原神社である。(一説に「鶏鳴偽声」を後悔)

先日、久しぶりに神社を訪ねてみたが、境内には湧き水を汲みに来る人たちでにぎわっており、すぐ近くにある菅原道真公が手足を洗ったとされる「史跡菅公御手洗の池」も残っていた。もう50数年も前になるだろうか、子どもの頃この池の水で硯をすると習字が上手になると、汲みにいった遠い記憶がある。

戸畑から太宰府に向かった道真公は失意のうちに延喜3年(903)2月25日に亡くなったが、いまだに学問の神様、天神様として親しまれている。

なお、日本三大天神と言われているのが、京都の北野天満宮、山口県防府の防府天満宮、福岡の太宰府天満宮である。

東風吹かば にほひおこせよ梅の花 主なしとて 春な忘れそ
年が明けると、太宰府天満宮の「飛梅」が春を告げる。

脳と性欲と満腹中枢

れくたあ監督

とあるナンパ師いわく、「いっぱい食う女はエロい！」

脳の性欲をつかさどる部分は、男と女で少しばかり場所が違うらしい。男は空腹中枢の近くに性欲をつかさどる部分があって、ひもじいと「ヤバい！」と思うらしく、結果「子孫ばつくらんば！」になるらしい。そして女は満腹中枢の近くに性欲をつかさどる部分があって、食わせると「産んでもいいかも♪」になるそうだ。

この前見た「飯と乙女」というDVDのなかの、妊娠を知った女が長い間働かないデブの同棲男にいった一言「貴方を食べられたらいいのに…」を思い出した。

「食べる」とか「食べさせる」って、「生きる」「生きていく」ことなんですよねぇ。もういい加減「腹ぺこキャラ」を卒業しなければいけないのだけど、相も変わらず「腹ぺこジョージ」。

真面目に働いてるつもりなんだけどなあ…

電車の中で

蘇宅韓五郎

先日、筑豊電鉄の中で男子2名、女子1名の茶髪の若者と出合った。
「席をかわりましょう」

と、言われた言葉に一瞬、周りをみた。このような言葉を掛けられたのは初めてであった。

そうか、俺もそんな年になったのかとつくづく思いながら丁重に断ったが…

「おいちゃん働きよるん」

「いいや、いままでいっぱい働いたけ遊びよる」

「いいなー」

「いいやろ、頑張ったぶんの褒美や」

と、若者達との会話は続いた。

電車の降り際に、

「おいちゃん、最後に聞いていい」

「ああいよいよ」

「会社を辞めたいと思ったことある」

「あるけど辞めんやった」

「なし」

「仕事が好きやった」

「うーん、そうなん」

「また、辞めて後悔するのが嫌やった」

「今度、会ったらまた声を掛けるけね」

恰好では分からない若者の言葉に、なんとなく酔いも手伝い爽やかな気分で家路についたとき。

酒飲み、こだわり（上） 多様化・拡大の歴史

吉本 光一

◇日本人3人に1人が酒にこだわり？

はらぐち酒店が毎月初めにネットに流しているホームページ「酒だより」を開くと、冒頭に「こだわりの酒・焼酎・ワイン ワイン・セラーのあるお店」と出てくる。酒飲みには、何かにつけてこだわりを示す人が多い。お得意にこだわりが多いから、小売店、造り酒屋にもこだわりが広がる。

こだわりのほこ先は、酒の銘柄、店（飲み屋）に始まり、燗の温度、肴、しょうゆの銘柄、香辛料、飲み相手、猪口、小皿、果ては店の人の言葉使いにまで、際限ない。客同士なら個人的なこだわりは「他愛ない」ですむが、商人（あきんど）との間ではそうはいかない。

地域ぐるみで昔ながらのこだわりが続いている例もある。九州や関西では「あて」はだれもが使う言葉だが、関東では長い間、なぜか卑賤な表現と受けとめられて、縄のれんの

飲み屋でも「さかな」と言った。おかずは海の物も山の物も菜(な)であり、酒の菜が肴だった。のれんをくぐって「さかなは？」と尋ねると「おさかなが切れて、煮物でよければ…」と返事が返ってくる。魚には「お」を付けて肴と区別した。

広島では「切れる(品切れ)」は禁句で「お魚がみてた」という。肴を盛る「小皿」は全国共通語だが、東京で生まれ育った人はこれをあえて「おてしょ」と呼ぶ。学習院に通う学童らが「さようなら」の代わりに「ご機嫌よう」と別れの挨拶を交わすのと、どこか似ている。おてしょとは御手塩(用の小皿)であり、戦前の陸軍では「てしょう」が軍用語として使われた。ついでながら軍用語とは、軍隊が俗世界とは別の世界であることを兵士に意識させるために使った日常用語で、洗面器は「面洗器」だった。

逆に東京で地方の地域的こだわりに悩む例もある。九州で刺し身などの薬味として重宝がられるゆず胡椒(こしょう)は、いまもラーメン用の香辛料と誤解されている。

酒飲みのこだわりようは実に多様だが、ネットで検索すると主力は酒の品質、風味へのこだわりであり、驚くべき数にのぼる。「こだわり 酒」に該当するものとして、日本の全人口の3分の1を超える件数が登場する。日本酒消費量の落ち込みに反比例するかのよう、こだわりの増大、多様化が激しさを増している。

◇山上憶良が詠んだ酒宴の変革

万葉の歌人、山上憶良が奈良時代の初め、筑前守として太宰府に出仕していた時期に詠んだ和歌に「罷宴歌」がある。

憶良らは 今ぞ罷らむ 子泣くらむ その彼の母も 吾を待つらむぞ

太宰帥(だざいそち=太宰府長官)が催した酒宴を退席する挨拶の歌で、憶良の家族を思いやる心情をうたった一首としてよく知られている。この歌をここに登場させたのは、日本酒が新時代を迎えた初期の姿がそこに現れているからである。

日本酒は縄文末期か弥生初期のころに誕生した、と考古学者はいう。そのころの集落は、吉野ヶ里遺跡にみられるように、神に仕える巫女(みこ)が中心地に座を占め、神を尊ぶ祭事と民を支配する政(まつりごと)が一体となった指導・支配が行われていた。祭壇が祭事の舞台で、酒は巫女が神に供え民に振る舞うために造られ、神と民を結ぶ重要な舞台装置として使われた。酒の消費者は巫女・首長で、この時期が何百年も続いた。

酒の消費者に変革が起きたのは、朝廷が確立し全国に号令をかける律令体制が敷かれたことによる。大陸からの文化移入を背景に生まれた王朝時代は、巫女中心の祭事を排し、朝廷の下部組織である官僚体制による統治への大変革を告げた。それとともに、酒は元首と臣下との間の絆を強めるための道具へと推移した。

「罷宴歌」は高校の国語の教科書にも載っている。国語の先生に聞くと、どこにでもあつた日常生活を詠んだこの歌がなぜ高い評価を受けているのか理解できない生徒が多いという。巫女支配から中央官僚支配への変革は、明治の改革、いまの時代でいえば共産主義国家・ソ連から資本主義国家・ロシアへの変革にも匹敵する政治革命であり、それが起こり、酒宴の姿を一変させた時期の歴史的な変化を詠んだ歌だ。それが分かれば、高校生の受けとめ方も大きく変わるに違いない。

憶良が太宰府へ赴任したのは726(神亀3)年、66歳のときだった。当時の九州は中央の律令政権と地元の権力者との間で土地支配をめぐる争いが絶えず、大隈国守の殺害が発

端で起きた隼人の反乱の緊張感が続いていた。憶良の上司の太宰帥は征隼人持節大將軍として出陣した大伴旅人だった。歴代の天皇の守護に当たる名門の家柄の出で文化的素養も深く無類の酒好きだったことが、万葉集に収められた13首の酒の歌からうかがえる。その一首。

あな醜(みにく) 賢(さか)しらをすと 酒飲まぬ

人をよく見れば 猿(さる)にかも似む

万葉集なかでサルを詠んだ唯一の歌だという。

若いころ唐に留学し大陸文化を身につけた歌人の憶良と酒好き文化人の旅人とは、官位の格差はあれどよく気が合ったようだ。一方では、反乱、騒動、テロがいつどこで起きるか分からない緊張感のなかでの宴は、夜を徹して飲み明かすことを許さない時勢があり、新時代の宴は節度・けじめを求められた。この点について、天皇名代の長官旅人と事務方代表格の憶良との間に、あうんの呼吸があったのだろう。新時代への共通のこだわりがそこに読み取れる。また、新時代のこだわりの宴への驚き・共感が、同時代の人々の心を捉えたことが察せられる。

王朝時代に元首と臣下の絆を深める役を担った酒は、その後の武家社会では武将と家来、大名と家臣の間で同様の役割を演じながら、その場を拡大していった。日本酒の第二の時代は、封建時代の崩壊とともに幕を閉じる。

11月4日 はらぐち酒店「秋の酒祭り」



編集後記

☆上田喜久雄さんの「天籟寺川橋物語」が今号から本論に入った。その中に、菅原公が「太宰府宰権師（ごんのそつ）に左遷」されたと記されている。一方、吉本の「酒飲み、こだわり（上）」では大伴家持を「太宰帥」としている。国語辞典によれば、太宰府長官は「太宰帥（そち）」であり、副長官が権帥だとされている。これをネットの google で検索すると、両方が出てくる。ただし Wikipedia では多くの国語辞典と同様、「帥」しか出てこない。天満宮に問い合わせると、「どちらが正しいかについては答えられないが、当方では帥を使用しています」という答えだ。市教委か観光課で確かめたかったが、11日は日曜日。という事情で、本号では「帥」と「師」が混在する結果となった。

☆江戸の昔、江戸の名物は、「武士・鯉 大名小路 広小路 茶店・紫 火消し・錦絵」と語り継がれ、さらに、「火事、喧嘩（けんか）にすきつ腹（中っ腹＝ちゅうっぱら＝ともいう）」が追加されることもあった。男女比率が極端にアンバランスで所帯を持ちたくてももてない男が多かったこともあり、職人の町の職人たちはいつもすきつ腹をかかえていたらしい。これって、女郎屋を繁盛させるための政策だったのか、れくたぁ監督にうかがいます。

（ぼんぼん仙）

☆起業祭も終わり立冬も過ぎた。子供の頃の起業祭は、「羹」「オーバー」という言葉が似合っていたが、今は季節も世の中も大きく変わった。

☆4日、はらぐち酒店がウエル戸畑で「秋の酒祭り」を開催した。参加者は130名を超える大盛況であった。日本酒、焼酎、ワイン、梅酒など約50銘柄が堪能できた。今後も年に2回は開催して欲しいのは吞兵衛の戯言？賛同される方も多いのでは。

小生は日本酒を一滴も吞まずに焼酎オンリーとした。これも楽しみ。

「まあ、ゆっくり世間話をしていきませんか。お茶でなくお酒を呑みながら」。

投稿をお待ちします。題材、文の長短を問いません。「酒」に縁のある内容であればいいことなしです。

投稿は、はらぐち酒店に預けていただくか、kei2@bronze.ocn.ne.jpへ宜しく願います。

「はらぐち閑話」は、はらぐち酒店HP (<http://homepagel.nifty.com/haraguchi/sake/>) もしくは、戸畑はらぐち酒店で検索していただいたの「かくうちの部屋」でご覧いただけます。

次回発行は1月7日(12月21日締切り)とします。(今朝の鮭)

はらぐち酒店：北九州市戸畑区中本町4番9号

電話093-871-2150

sake-tobata@nifty.com